

1. 第3回仙台市音楽ホール検討懇話会 議事要点

■第3回仙台市音楽ホール検討懇話会の議事

1. 第2回懇話会の議事要点の確認を行った。
2. 議題「施設の構成と規模の考え方、事業運営の考え方、管理運営の考え方」について、資料に基づき説明をし、議論を行った。

■要点

1. 第2回懇話会の議事要点について

(質問) 人材育成機能において、想定される人材はどのようなものか

(事務局)

- 多様な人材育成が現実には行われるであろうが、重要と考えているのは、文化芸術と社会の課題をつなぐ人材、プロデュースする人材である。
- この施設が従来からあるホールの持つ機能を超えて、文化力を社会に発揮していくことやまちづくりへの働きかけなどを想定している。このような人材は、日本ではまだ少ないことから、この施設のためにも、また市域に広げていくためにも必要と考えている。

2. 施設の構成と規模の考え方、事業運営の考え方、管理運営の考え方について

(1) 必要な施設群、施設や設備の性能、施設規模の考え方について

①施設規模については、必要と需要をすり合わせていく検討が必要

- 整備の方針から必要な施設群を想定し、施設規模が算出されているが、需要の側面から規模を想定していくことも必要ではないか。需要を掘り起こさないといけない施設、利用者数だけではなく価値を認めてもらう部分なども踏まえ検討し、すり合わせる形で施設規模を想定していく必要があるのではないか。

②新しい技術をどのように取り込んでいくのかは大きな課題である

- 一瞬のうちに世界の隅々に情報が伝わる時代、さらに急速に発展しているAI技術や通信技術、メディア関連技術などをどのように組み込み、対応していくのかはハコモノを造る場合に大きな課題になると考えられる。
- 縮退する社会のなかで東北の拠点として仙台に広域から集まってくることについては、新しい産業革命の力で公共輸送機関も大きく変化するであろうし、可能性は高まると考えられる。

③整備の目的を基盤とし、公の施設として何を造るべきかを明確にすべき

- 音楽や舞台芸術など実演芸術は経済効率化を推し進めることができないものであり、一定の水準の活動をするのであれば、多くの施設や設備、人、時間、お金を必要とする。それゆえに自治体が公の施設として整備してきている。一部の商業的興行施設を除けば、民間はこのような施設は造らない。
- 仙台市が将来を担う子ども達のために、目的に示されたような施設を造ろうとし、最低限必要な質の確保を考えると、資料として提起された施設内容を持つこと、施設規模は必要ではないか。それを造る覚悟があるのかどうかを明確にする必要がある。その上に、多様な価値創造や効果を高めていく努力があるべきである。

④潜在的なマーケットを掘り越し、成功した兵庫県立芸術文化センター

- 事例に挙げられている兵庫県立芸術文化センターも、整備前には西宮という神戸と大阪の中間にある立地から、客は来ないという声もあったが、現実には、年間公演関係で約50万人、関連催事などを含めて70万人程度が訪れている。しかも、競合すると想定された関西の施設の来館者数は減っていない。つまり、限られたマーケットを取り合うのではなく、新たに大きなマーケットを掘り起こしたと言われる。
- 音楽ホールは東北さらに広域を見据えて、新しいマーケットを掘り起こしていく施設となることを期待する。同時に、それなりの覚悟をもって整備、運営体制を創る必要がある。

(2) 施設が整備され、開館がスタートではない。早期から具体的な取組みを始めるべき

①施設が建ってからの計画だけでなく、建つ前からの取組みを計画していくべき

- 仙台市民中心に、東北やいろいろな地域の人たちの音楽など実演芸術に関する楽しみ方の喚起、より一層の深い関心を持った層の掘り起こしなどについて、施設が建つ以前から取組むことが何よりも重要となる。

②変化する次世代層の嗜好、場の使い方、移動の行動などを考えていく必要がある

- 近年、コンテンツツーリズムやコンサートなどのライブツーリズムなど、新たな観光行動が指摘される。若い世代を見ていると文化芸術との関わり方が常に変化しており、音楽などに対する嗜好、施設や場の使い方、移動の仕方などを捉えていく必要がある。

③ソフト事業の先行により需要の掘り起こしと多様なサービスの開発を行うべき

- 兵庫県立芸術文化センターは、阪神・淡路大震災もあり、当初の構想から劇場ができるまで15年以上の長い時間を要した。しかし、その間先行的なソフト事業を継続的に展開してきた。そのことが幅広いコンセンサスの形成と需要の掘り起こしにつながった。その結果として劇場ができてから、劇場と県民との間に良い循環、相乗的な効果を生み出す関係を造ることができた。

※事務局：施設整備までの時間も先行的な取組みを進めていくと考えている

- 施設整備までは時間を要するので、その間にも若者のニーズや行動は変化していくであろう。若者を含め、市民のニーズやその変化を把握するいろいろな仕掛けをつくるとともに、プレイベントなどを継続的に行いながら、音楽ホールの活動像を市民と共有し、開館後につながる関係を造っていくことが大事と考えている。

(3) 仙台に新しい価値を生み出す施設となることを目指すべき

①都市型観光地の一つとして音楽ホールを位置付ける

- 仙台は、東北のなかでは都市観光地として突出した位置を占めている。音楽ホールを都市型観光地として位置付けることが必要ではないか。
- 都市型観光地としての魅力とは、市民が利用し、市民で賑わっているところに魅力がある。ホールだけでは難しいが、いろいろな形で市民の活動を後押しする施設を持つ、例えば、定禅寺ストリートジャズフェスティバルなどのイベントを音楽ホールの事業の中に組み込んでしまうぐらいの施設にする、なども考えられるのではないか。

②音楽ホールによって、新しい価値を仙台に生み出す仕掛けが必要

- 都市型観光施設とすることで、新しい価値を生み出すことができると考える。
- 民間空間に比べて低利用、開発の余地が残っているのは公共空間であり、公共空間から新しい価値を生み出すことが課題と考える。例えば、定禅寺通りの活性化などもこの一環として取り組んでいる。音楽ホールが新しい価値を生み出すことができれば、その周辺は都市観光的にも魅力ある、集客力のある界限になっていくと考えられる。

※事務局：都市型観光施設としての仕掛けを作っていく必要があると考えている

- 都市型観光施設として、交流人口の拡大に寄与していくことは、音楽ホールの一つの大きな役割になると考えている。それはご指摘いただいたように、観光向けの活動をするということではなく、市民が日常的に来て賑わうことが何よりも重要であり、そのような仕掛けを作っていく必要があると考えている。

(4) 貸館事業は施設の持続的運営のための重要な概念

①自主事業がホールの中心課題と考えるべきではない

- 自主事業はマーケット、観客の想定が弱く、制作には膨大な経費が必要となり、赤字となる場合が多い。自主事業がホールの中心課題ではなく、様々な主体がホールを使って多様な活動を行うことに、より適切な場となるようにしていくことが重要ではないか。

②貸館事業は持続的運営の重要な概念。多様な活動が市民に提供されることが大事

- 多様な借り手により多様な活動が市民に提供されることで、市民の日常生活の質を上げ、そのことが魅力になり、次のステップに進むといった可能性が広がる。仙台のような全国的にも核となる都市では、全国的なツアーなど多く需要があるはずである。貸館が重要な役割であることを基本認識として持つべきである。

(5) ホール施設の利用特性と賑わいづくりをどう両立させるか

①平日の昼間など公演がないときに、賑わいをどう作るかが課題

- ホールはどうしても土日中心、夜間中心の施設であり、ホールで公演のないときにどのように賑わいをつくりだしていくのが、まちづくりとしては課題となると思われる。この部分に対する検討が必要である。

②土日、夜中心の公演のあり方も変化してきている。従来にとらわれない発想を持つ必要がある

- 土日、夜中心と考えられてきたホールも、観客層の高齢化などに対応して、昼間の公演が増えてきている。朝公演の希望すらある。ギャラリーなどと比較すると時間制約が強いものであるが、市民の意向、行動に即した使われ方を工夫していくことが大切である。
- 今回の施設は、従来の施設にはなかったまちづくりと連携する機能や賑わいづくりのための施設、そのための運営なども計画されているので、それらを新たな取組みを有効に機能させていくことが大切ではないか。

(6) 音楽ホールの経済的波及効果、まちとの関係について

①経済波及効果、交流人口拡大のために、まちとの機能補完を明確にすべき

- 大規模な施設となっており、どのような経済波及効果を想定しているのか、交流人口を増加させるためにどのような機能を想定しているかが大きな課題である。例えば、札幌コンサートホールKitaraに行ったが、中島公園の中にあり、駅からの距離もある。終演後の

飲食なども難しい。経済的波及効果はあまり大きくないのではないかと考える。

- 経済波及効果を大きくするためにも、まちに委ねることができる機能、まちと連携して補完できる機能はまちの力を使うことが望まれる。そのためには立地が何よりも重要といえる。

※事務局：まちとの連携、補完関係を考えるには立地が重要と考えている

- ホール施設の立地は、繁華街とは離れた文教ゾーンに整備をしてきた時代もあり、まちとの連携が図られない施設もある。これからの施設はまちとの連携は重要な課題であり、そのためにも立地が何よりも重要であると考えている。

※事務局：経済波及効果は社会的波及効果も含め、総合的に捉える必要があると考えている

- 音楽ホールの経済波及効果として、ホールだけではない総合的文化芸術振興の拠点、まちづくりの拠点ともなる施設である。交流人口拡大、経済波及効果のみならず社会的波及効果を持つものであり、それを含めた総合的な評価をしていきたいと考える。

(7) 音楽ホール整備の意義、目的が揺るがないようにすべき

①仙台ではこれまでできなかった活動ができる、優れたホールを造ることが何よりも大事

- 札幌コンサートホールKitaraは、確かに不便な面はあるが、音響だけでなく、全体として大変優れた施設であり、国際的な事業も行われ、稼働率も高く、人も多く集まっている。公園の周辺への波及効果は大きいものがあるのではないか。
- 波及効果も大事であるが、何よりもホール施設としてバックヤードなども含め、全体として優れた施設であること、仙台でこれまでできなかった活動ができるようになる施設であることが何よりも大切な事である。例えば、搬出入トラックの出入りや荷捌き、運営に必要な諸室、施設内の動線など具体的な使い勝手や安全性に優れること、また、施設運営のスタッフ体制の充実度などが重要であり、ホールとして難しい課題はまだたくさんある。それらを解決された施設として整備することが大事である。

②ホールでの公演や発表は日常の膨大な練習の積み重ねの成果であることを認識すべき

- 県の合唱大会を例にとれば、3日間で出演者は4,000人、入場者は3,000人であり、1日50団体程度が次から次へと出演する。この運営には大ホールだけでなく、多くの諸室と分刻みの運営を可能にする適切な動線で配置されることが必要となる。そのような施設は仙台にはなく、苦勞をしてきた。東北、全国大会などとなるとさらに大変である。
- 出演は1団体10分位であっても、若い人たちが1年間、膨大な時間と情熱を費やして練習を積み重ねてその場に臨む。このような場を仙台に持つことの波及効果も考えるべきであるし、ホールを整備する大きな動機になるべき効果ではないか。

※事務局：東北、全国大会などの開催に対応できることは公共施設の役割と考えている

- これまで仙台では開催する場がなかったこと、大会等の開催の意義や効果などのご指摘をいただいたが、東北、全国大会などの開催は仙台の役割と考えている。例えば、吹奏楽の大会は大型楽器の搬出入のために、大型トラックが出演団体と同数、次から次へと出入りする。そのような運用が適切、安全に行えることも、施設のあり方や立地を考える場合の重要な要件になると考えている。
- 大会開催を通じて、次代を担う世代の努力の発露が仙台で実現されるのであれば、観光、交流という点でもよい結果を生んでいくと考えている。

以上